

湯川の遺産

九後 太一

思えばこの5年間（すなわち2期基研所長をつとめた4年間とその後のこの1年間）は、湯川秀樹博士の遺産と呪縛の大きさを痛感させられた。

2003年4月に京大物理教室から基礎物理学研究所に所長として移るやいなや、基研創立50周年記念事業の準備を始めねばならなかった。これには同時に、基研の「共同利用」、研究部員会議を中心とした運営体制、さらには所員の任期制、といった、基研創立以来の基本的体制の見直しが含まれており、それが大変な作業であった。国立大学法人化の04年度に向けて、中期目標・中期計画策定、共同利用研再定義問題、学内の諸規定・諸体制の改訂・改正など、色々な仕事があった。さらに04年度から本格的に「滞在型国際共同研究プログラム」開催の概算要求のための仕事、そのための国内外のコミュニティの支援獲得、特に日本学術会議物理学研究連絡委員会に計画支持の対外声明をいただくことが、学術会議の組織替えの時期と重なり大変であった。基研を従来の「国内共同利用研究所」から「国際共同利用研究所」へと発展させるためのこの概算要求が通るまでに3年を要した。

05年度は、基研の自己点検および外部評価があった。それはまた、07年度末に時限の来る「非平衡系物理学」分野の恒久化に向けての作業もかねていた。さらに、先に06年度を「湯川・朝永生誕百年記念年度」として京大が一連の記念事業を実施するよう、佐藤文隆湯川記念財団理事長や笹尾理学研究科長とともに京大総長に働きかけていたが、それが正式に決定され、05年度にはその準備が本格的に始まった。中でも一番の事業は「湯川・朝永生誕百年記念展」を行うことであり、筑波大学、大阪大学にも呼びかけ、合同の準備委員会を立ち上げ、実行準備の実務作業委員会を定期的に開催した。（この準備を中心的に進められたのは、佐藤文隆、小沼通二、江沢洋の3先生であったが。）この記念展は06年3月の国立科学博物館を皮切りに、筑波大、京大、阪大、で開催し、さらに07年度に広島、宮崎、九州、北海道、新潟、金沢の各大学を巡回した。この巡回展でもそれぞれの大学の担当者は大変だったろうが、その話し合いと立ち上げに尽力した。

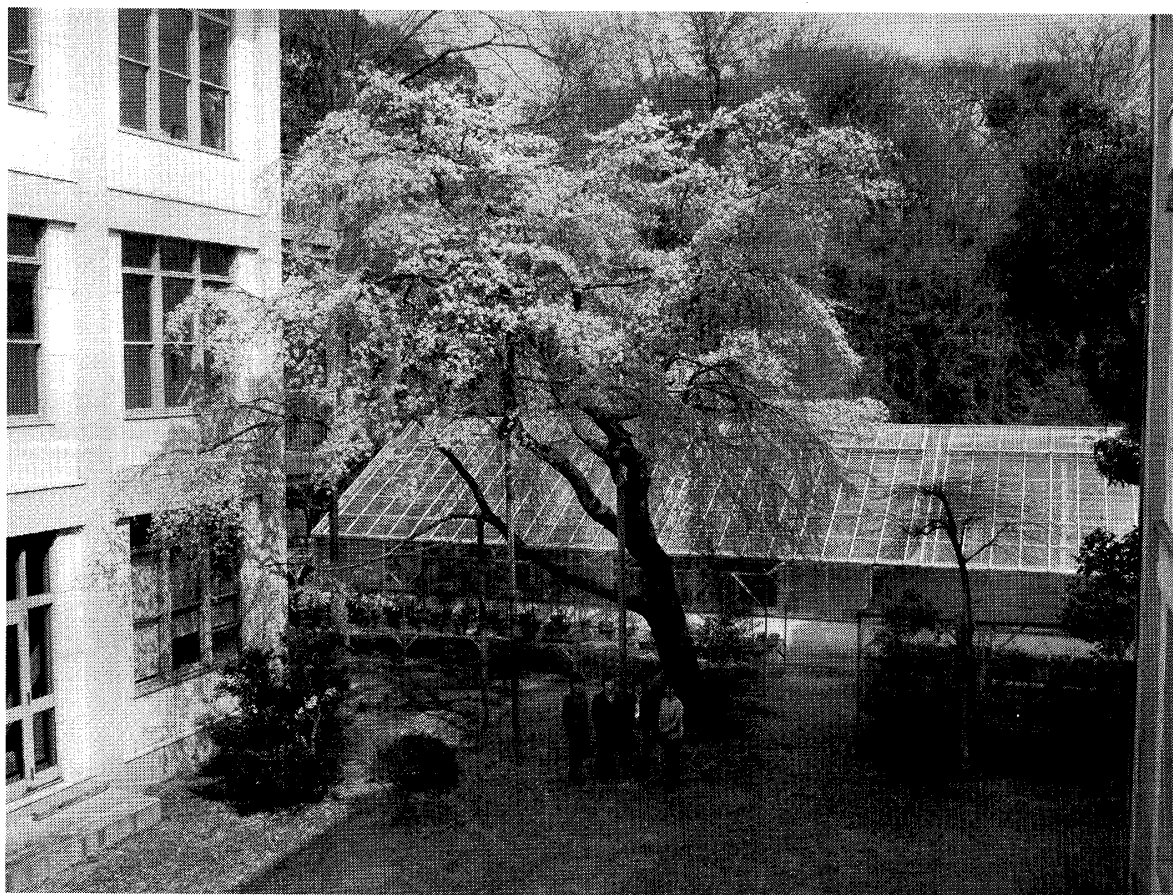
06年は12月に京大芝蘭会館で開催した湯川・朝永生誕百年記念シンポジウムの組織がまた大変であった。それに先行して、05年と06年の秋に坂東さんを主導者とした基研研究会「学問の系譜」が2回開催され、その世話人もつとめた。07年1月23日の京大の湯川・朝永生誕百年記念式典・記念講演会も、担当部局長として講演者の招待交渉から講演会の広報までやった。

07年度に入ってやっと所長職を解かれたが、未だに労働の8割以上が湯川関連である。湯川記念館改修の担当委員、中庭に建設する交流ホールの寄付調達、プロGRESS誌の理事長としての非常に多くの仕事（例えば、労務問題、印刷業者選定の入札化のための仕事、プロGRESS誌の完全物理学会への移行、オープンアクセスにからむ仕事、などなど）、さらには、今悩まされているのだが、湯川・朝永生誕百年記念事業の遺産とも言うべき「湯川朝永奨励賞」の選考委員長と実施の実質的責任者にさせられている。また、この3-4ヶ月は、編集者となっている。昨年の10月から11月にかけては、湯川・朝永生誕百年記念シンポジウムのプロシーディングスを編集し、その後の一ヶ月は、青木君の下請けとして、この学問の系譜報告集の編集作業をした。今現在も含め、この一ヶ月は、21世紀COE研究拠点の最終報告集の編集作業に忙殺されている。（これだけが湯川とは必ずしも関係がない仕事。）湯川史料室の資料整理も科研費を申請したが、それが通れば史料室委員長として実作業が始まるだろう。またほぼ一年後の湯川国際セミナー（YKIS）も組織委員長を仰せついているし、国広さんが物理教室に移った後は滞在型国際共同研究プログラムの実行委員会委員長を務めることになっている。湯川記念財団の常任理事にもなった。

以上色々数え上げたが、私の生活のほとんどが湯川がらみであった。そして基研と言い、物理学と言い、プロGRESS誌と言い、多くのことが湯川の遺産であり、我々はそれを享受している。滞

在型概算要求が通ったのも湯川のご威光と基研の歴史が多分に効いており、先に、湯川記念館の中庭の交流ホールの建設資金の寄付が松下電器からいただけることになったのも、湯川のおかげである（湯川と松下幸之助は親交があった。）しかしその遺産は、半世紀を経た今日、必ずしも正のものばかりとは限らないことも明らかである。

「死せる孔明、生ける仲達を走らす」という言葉があるが、湯川は、死して後4半世紀、生誕百年、の後の現在でも、私を初め、物理学研究者から一般人まで、多くの人々を動かしている。「いつまでも湯川、湯川と言っていてはダメですよ」と色んなところから言われる。湯川を忘れるのではなく、湯川をのり超えてゆくべき時が来ている訳である。本報告集もそのための一助になればと思う。



ph14 湯川記念館中庭の桜（写真：野坂京子氏提供 撮影日 2007年3月29日）

[京都新聞 2007年3月31日] 同記念館のサクラは高さ十メートル、幹周り百八十センチ、枝は十メートル四方に張っている。樹齢は推定八十年だが、明確な由緒は分かっていなかった。

湯川博士の生誕百年の今年、かつて醍醐寺のサクラの名木を残すため、「クローン桜」を咲かせた住友林業筑波研究所（茨城県）が同寺の依頼を受けて同記念館のサクラを調査した。DNA解析した結果、遺伝子の一部が一致。同寺境内の清瀧宮本殿の南側にあるシダレザクラ（樹齢推定百年、高さ十七メートル）と両親のどちらかの木が同じで、挿し木や接ぎ木でなく、種子で苗を繁殖させ育てた木が移植されたことが分かった。

醍醐寺によると、国際理論物理学会議が湯川記念館などで開かれた1953年9月、醍醐寺・三宝院を訪れた湯川博士が会議開催の記念として、当時の岡田戒玉門跡にシダレザクラの若木の移植を申し入れたという。湯川博士から後日、「櫻木は誠に見事なもので、流石は醍醐の櫻とて、如何にも高尚優美。今までさびしく平凡でありました裏庭の芝地も、風流の趣をそえ、又さえざえと見えて参りました」とつづった礼状が送られていたことも分かった。

湯川記念館は六月から中庭に大講義室を建設する。サクラを醍醐寺に戻すことも同寺から提案されたが、巨木を搬出する通路がなく、やむなくサクラの枝を伐採することになっている。九後太一所長は「現在も年間二十件以上の研究会があり手狭になってきた。増築は物理学の発展、研究のために必要で、湯川先生も枝を切ることを許してくださると思う」と話している。